

北軽井沢の混交樹林の林縁で見つけた大型のキノコです。一見すると白いテングタケの仲間にも見えますが、観察を進めると異なる特徴が次々と確認できました。最も重要な点は、成熟したひだが濃いチョコレート色になり、孢子紋も暗褐色であったことです。テングタケ科の孢子紋は白色であるため、この時点でテングタケ科は除外できます。また、ひだは柄から離れる「離生」またはごく浅い「湾生」で、柄には厚く発達した革質のつばが残っていました。これらの特徴はハラタケ目・ハラタケ科・ハラタケ属に共通する重要な識別点であり、本種はシロオオハラタケ（白大原茸 *Agaricus arvensis*）が最も有力な候補です。

さらに、生育環境も同定を後押ししました。本種は林の奥深い林床ではなく、日当たりのよい林道脇の草地に近い場所へ群生していました。しかも、束になって生える「束生」ではなく、それぞれが独立して地面から発生しており、大型で白色の傘を広げています。このような環境や発生状況は、草地や林縁を好むシロオオハラタケの生態とよく一致します。写真では、若い個体は淡い肉色だったひだが、成熟すると濃いチョコレート色へ変化している様子も確認でき、ハラタケ属の典型的な成熟過程を示しています。

もちろん、ハラタケ属にはよく似た種類も多く、最終的な種の確定には、アニスのような甘い香りの有無や、柄の基部を傷つけた際の黄変、つば裏面の歯車状の構造なども確認する必要があります。しかし、本個体は「暗褐色の孢子紋」「成熟するとチョコレート色になるひだ」「離生～湾生のひだ」「厚く発達したつば」「大型で白色の傘」「日当たりのよい林縁に群生」という特徴がよく一致しており、現時点ではシロオオハラタケと判断するのが最も妥当と考えました。キノコの同定では、一つの特徴だけで結論を出すのではなく、形態や孢子、生育環境など複数の情報を積み重ねて総合的に判断することの大切さを、あらためて実感した観察でした。

(2026年6月下旬／北軽井沢)

